

-  繫飼場跡
-  信号機
-  牧場の範囲(推定)
-  牧の田(推定)

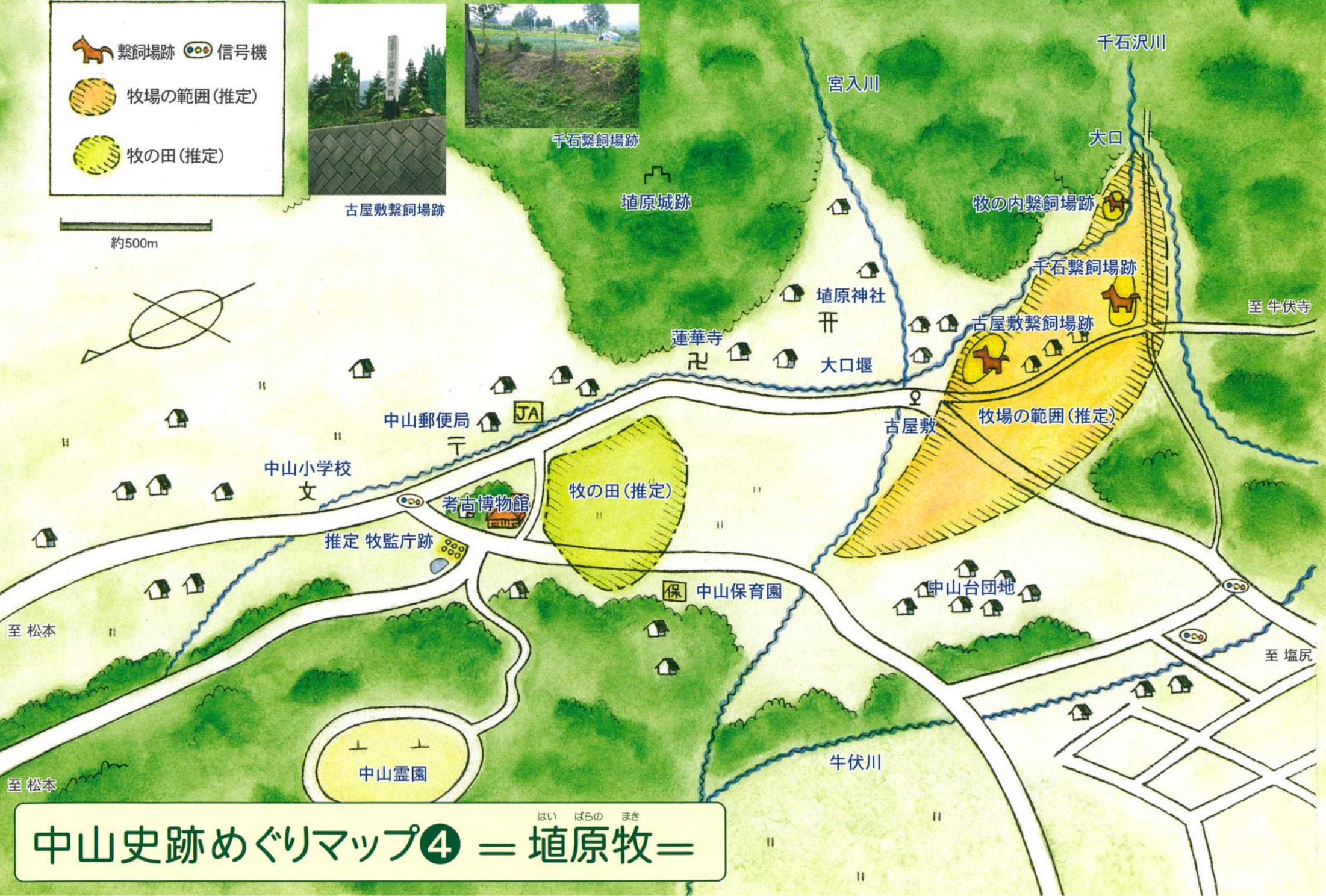
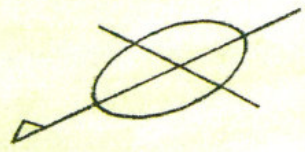


古屋敷繫飼場跡



千石繫飼場跡

約500m



中山史跡めぐりマップ④ = 埴原牧 =

はい ばらの まき

はい ばらの まき 埴原牧

今から約1400年前、大化の改新の少し前ころから埴原の南部に牧場がありました。8世紀になると律令制度が制定され、「公地公民」とされた牧場は直轄の牧とされました。平安時代には、全国に設置された軍団の馬を供給するための諸国牧(官牧)、都にみつぐ馬を確保するために設けられた御牧(勅旨牧)、諸国からみつがれた馬を飼う近都牧の3種類の牧がありました。埴原牧は御牧(勅旨牧)に属しています。

けい し じょう あと 繫飼場跡

千石と古屋敷には、冬の間馬を繋いでおいたり、都へ送る直前に調教するときに飼ったと思われる、うまやの跡が残っています。

うまや跡は、ゆるやかな西の傾斜面に南北に細長い段々を造り、上と両側に堀をめぐらせた跡が今でも確認できます。また、千石の集落の上の山ぎわにも、3段のうまや跡だったらしい場所がありましたが、現在は残っていません。

もく げん ちよう あと 推定 牧監庁跡

牧監庁は平安時代、長野県に16あった牧場を統括する役所で、埴原牧にあったと考えられています。考古博物館北西にある推定牧監庁跡は、昭和39年に発見された礎石群で、16.2m×5.4mの建物跡であるかと推定されています。

信濃16牧推定位置図
(萩原牧を除く)
信州馬事研究会 1988
『信州馬の歴史』信母新聞社刊 参照



大口堰と牧の田(推定)

千石沢の上流大口で取り入れ、古屋敷の尾根先を切りとおして音渡川に流し、水平に沖田や鳥内まで水を引いた堰です。

この堰が造られたのは古く、埴原の牧の開発者が居館と牧の役場を鳥内に設置し、沖田を牧の田として開拓したと思われる所にさかのぼります。千石や宮入川の水利権が発生する前に引かれた堰です。

牧の範囲(推定)

馬1頭を飼うのに、1haの広さが必要だといえます。埴原牧では、平均100頭ほどが飼われていました。千石、古屋敷、大久保、尾池を合わせた約100haが馬を放し飼いにした牧場の範囲と思われます。周りは沢や急な崖で囲まれた、天然の柵を利用した牧であったようです。

埴原の牧は、馬を飼う場所だけをさすのではなく、牧の役場や管理者の住居、そこに働いていた人々の住む集落、耕作する田畑などを含めた広い範囲を指していたものと思われます。

中山地区のほ場整備にともなう発掘では、奈良・平安時代の集落跡は発見されていません。牧を管理したり、働いていた人々の住んでいた場所はどこにあったのでしょうか。今のところ分かっていません。